

Z会東大進学教室

一橋大融合文・文語文



《例題 1》

《解答》

L3F / 夏期 / *1

出典：石川淳『江戸文学掌記』／一橋大学・05年

文章略解……横井也有著『七娘記』は八百屋お七の放火事件をめぐる論評である。お七の犯行の動機が幼い恋心に発した無垢なものゆえ罪を問うべきでないとする説と、天下の法を犯した大罪であり、私情に流されず死刑にすべきであるという説を、也有は併記するのみで是非に触れない。これは、俳諧師として人情の機微を描く自由な隠居暮らしが許されているように見えて、実は前参政として藩の秩序に組み込まれていた也有の姿を髣髴とさせてくれる。

《解答例》

問1

・お七の放火は幼い恋心による犯行であり、幸い大火も免れたので、死罪にせず当人の悔悛を待つべきである。(49字)
・お七の行為は痴情に発して法を犯し、社会全体に害を与えた悪事であるので、同情の余地はなく死刑に当る。(49字)

問2

恋心を思い遣ることのできる人。(15字)／男女の心情の機微を察する粹人。(15字・別解例)

問3

あだし心…その場限りで中身の無い浮気心。(15字)
わけしり…男女間の事情に通じていること。(15字)

問4

也有は隠退こそすれ前参政であり、常に発言が政治性を帯びるので、俳諧師としては自由に生きられないから。(50字)

出典：唐木順三『日本人の心の歴史』 / 大阪大学 人間科・法・経済学部・98年

文章略解……古今集以後、和歌とは技巧を凝らして「作る」ものとなった。そういう「言葉の遊戯」を極限まで追求したのが、藤原定家であった。定家の歌風は精緻繊細・絢爛巧緻と言われている一方で、後鳥羽院が評したように技巧的にすぎて歌に心がこもらず、時季により適切な詞を詠んでいないという面もあった。定家の「有心体」が完成の域に達した後は、彼自身は作歌への興味を失ったのか、歌学や歌集の編纂や、連歌などに手を染めていた。

現代語訳……

〔来ぬ人を……〕 来ない人を待っている（私は、（ちょうど）松帆の浦の夕風（のころに）焼いている藻塩の（下燃えがひそかに燃えさかる）ように、（心秘かにあなたのことを恋いながら）身も焦がれております（出典：『新勅撰集』巻十三恋三）

〔春の夜の……〕 春の夜の、（短くて儂い）夢の浮き橋がとぎれてしまい、（それはあたかも、ふと目覚めていま目になっている）峰から（横にちぎれて）離れていく横雲の（明け方の）空のようであるなあ（出典：『新古今集』巻一春上）

〔旅人の……〕 旅人の袖を吹き返すような（寒く冷たい）秋風の中で、夕日が寂しく（射して）山々の架け橋となっているよ

（出典：『新古今集』巻十羈旅）

〔此道を……〕 この（和歌の）道を趣味とする人は、ほんの一次的にでも（和歌に対しての）こだわりの気持ちを失って、いい加減に（その場の思いつきだけで和歌を）詠み流すことがあってはなりません。

しっかり（心の）構えをなして、（歌会の前に題が出る）兼日（の場合）でも、（歌会の場で題が出る）当座（の場合）でも、（自分

のなした)歌をじっくりと(自分自身で)口に出して詠んでみて、(歌の調子を)よく整えてから(歌会の場に)提出するのが望ましいものである。(歌を詠む際に)急いで雑にしてしまうこと(がある場合には)は、必ず後に(その歌に対する)非難があるにちがいない(からです)。

〔定家は……〕(藤原)定家は二人としない(優れた)者である。優美に技巧を凝らしてあるように見える(和歌の)姿は、本当にたぐい稀(なもののように)に見える。

(定家が)和歌(というものを)をよく知っているという様子は、非常(にすばらしい)ものであった。ただし自作を弁護する気持ちになってしまうと、鹿をもって馬としてしまうような(強引な解釈をする)ものである。(その様子は)傍若無人であり、道理を越えてしまっている。他人の(批判する)言葉を聞こうとしないのである。

あの(藤原定家)卿の(読む)和歌の姿は、格別な(「優れた)ものであるけれども、他人が(それを手本として)真似をするのに適したものではない。(定家卿は、和歌に)心がこもっている様子になるのを願ってはいない。ただ、用語や(和歌の)姿が繊細で優美であることを本旨としているので、そ(の和歌)の奥義に秀でていないような初学者が(定家の歌を手本として)真似すると、(和歌の)本質を失ってしまう(という)ことになってしまいうにちがいない。

〔万葉はげに……〕『万葉集』は本当に時代も古く、人の心も純粋に冴えて(いた時代の歌集であり)、今の世で(万葉集を)手本としてもと(うてい(万葉集の歌風には)及ぶことはできない。特に(和歌を)学ばはじめの時に、何の気なしに古歌の形を(まねて)詠むことがあつてはならない。

〔いささかも……〕(藤原定家の和歌の詠みぶりには)ほんの少しも、(和歌を詠むときの)事情によつたり時節によつ(て歌の趣向を変え)たりすることがない。

※ 解答欄の大きさは、いずれも横35mm×縦175mm。これに見合う長さの解答は90〜110字程度と推測される。《解答例》として示したのも、おおむねこの範囲内に収めてある。

《解答》

問1

「まつ」⇨掛詞で、人を待つとの意の「待つ」と地名の「松帆」の一部を掛けている。

「まつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の」⇨序詞として、「身もこがれ」を導いている。

「焼く」「藻塩」⇨いずれも縁語で、「こがれ」に因んでいる。

問2

和歌を詠む際には、その場限りのいい加減な気持ちで読み流すだけという態度はあつてはならず、歌に対してしっかりとした心を持って、自分の作った歌には推敲を加えてから発表することが望ましい、という意味。(97字・解答例)

問3

『万葉集』は時代が古く、後の時代の人が学んでも当時の人々の澄みきった心には到底及ばないであろうということに加え、特に初学者がその歌風に馴染むと、優美繊細な技巧を学ぶ上で障害になりかねないから。(96字・解答例)

問4

定家は六十歳までの間、作歌における趣向や技巧を凝らしつづけ、「有心体」というもはやこれ以上はどのようなにもならない完璧な歌風を完成してしまっていたため、それ以後は作歌への関心を失うことになったと考えられるから。(102字・解答例)

問1 「すべてを指摘し」とある以上は、この歌に用いられている修辭を、解答欄の範囲内で可能な限り指摘する作業が求められている。

この種の出題の場合、最も注意すべきは「掛詞」である。これは、問題文中にも『経る』と『降る』、『長雨』から『眺め』（3～4行目）と述べられているところに相当する。その上で傍線部分の歌を見ると、「まつほの浦」に注が付されていて、「松帆」が地名であることが示されている（この注でもわかるように、入試問題における「注」は、解答を書くのに必要な情報を出題者の側で補ったもの、という性質を持っている）。まずはこの「待つ」と「松帆」の指摘が欲しい。

また、問題文中に『降る』から『長雨』（4行目）とあるところに相当させて、「縁語」の指摘も欲しいところだ。「縁語」とは「意味や音の上で関連を持った言葉」という意味であるが、実際に和歌の中で「縁語」を探していこうとする際には、「中心になったテーマ」を軸にしていくことを心がけるといい。この歌では「来ない人を待つ」↓「身も焦がれる」ということ、つまりは「恋い焦がれる気持ち」がこの歌を貫く中心的な思いである。ではこの「焦がれる」に因んだ語は何なのか……と考えていくのだ。ここでは「焼く」から「焦げる」へ、また「藻塩」が「焦げる」というふうには、意味上の連関がある。「待つ」や「浦」はそれ自体が直接に「焦がれる」「焦げる」との意味のつながりを持つとは言にくいので、「縁語」として指摘するには及ばない。

このように考えてくると、「まつほの浦の夕なぎに焼く」の部分は、単に「焦がれる」という中心的な思いを導くための技巧的な意味合いしかない（つまり、「松帆の浦の夕なぎの塩焼きの情景」がこの歌のテーマではなく、あくまでも「焦がれる」という語を巧みに導くためのものではない）ことがわかる。このような技巧を「序詞」と言う。この点の指摘も欲しいところだ。

なお、この歌は、「名寸隅の 舟瀬ゆ見ゆる 淡路島 松帆の浦に 朝なぎに 玉藻刈りつつ 夕なぎに 藻塩焼きつつ 海人海女 ありとは聞けど 見にいかわむ よしのなければ ますらをの 心はなしに たわや女の 思ひたわみて た廻り 我はぞ 恋ふる 舟楫をなむ」（古今集巻六・九四〇・笠金村）を元歌とする本歌取りの歌になっている。しかしながら、この歌も元歌もさほど著名なものではなく、したがってここまでのレベルでの「言葉の遊戯」（修辭）の指摘を出題者が受験生に求めていたとは思われない。また、実際に指摘できた受験生も（たまたまどこか見たことがある、という人以外には）ほとんどいないであろう。したがって、この点を指摘できなくても実際の入試においてはほとんどマイナスにならないものと考えられる。

問2

ここで要求されているのは「解釈」であるが、融合問題の古文部分に傍線部が設けられていることから推せば、やはり傍線部分のそれぞれの言語要素に相当する文言を解答の中に示し、それを核として、解答欄の許す範囲で肉付けをしていくことを心がければいい。

「なほざり」（等閑）とは「いい加減に扱うこと」の意味。「よみすつ」は「詠む」＋「捨つ」の複合動詞。「詠んでそのままにする」「詠みっぱなしにする」程度の語が当てられればいい。この傍線部分で定家の述べる和歌の心得であることに照らせば、「べからず」は禁止の命令に解するのが妥当。というわけで、「いい加減な気持ちで和歌を詠みっぱなしにする」ということは、あってはならない」という内容が解答の核になる。

あとは解答欄の範囲内で適宜具体的な説明を補えばいい。《解答例》ではその「禁止の命令」の後に「ではどうするのがよいのか」に相当する部分の教えを補足しておいた。

問3

「定家は……言ったと思うか」という設問の指示が示すとおり、この解答を導くには、問題文中の内容だけでなく、ある程度は推測してまとめることが求められている。

問題文中で藤原定家とは「言葉の遊戯」の「極限」に現れた人であるとされている（7行目）。そしてその定家の歌は「技巧をつくし、とりものをつくし、もはやこれ以上如何ともなしがたいといふやうなもの」（28行目）である。そのような性質を押さえた上で傍線部分直後の「万葉はげに代もあがり、人の心も……あるべからず」（22～23行目）の記述を検討していけば、おおよそ以下のようなポイントが浮かび上がってくるはずだ。

- Ⓐ 万葉集は時代的に古く、新古今集の時代とはちがって人の心が澄みきっていた。
 - Ⓑ 新古今集の時代には、いくら努力しても当時の人の心には及ばない。
 - Ⓒ したがって、これから歌を学ぶ人は、技巧を覚える必要がある。
 - Ⓓ その点で、初めから万葉集のスタイルに馴染むことは危険である。
- 以上四点の示された解答ならば基本的にOK。

問4

「どうしてそのように思うのか」という設問の指示は「どのような意味で『尤も』だと言っているのか」という意味に解釈できる。ここでは「定家は晩年の二十年は作歌から離れた」（32行目）ことにいかなる意味で筆者が共感したのか、を考えていくことが課題である。

藤原定家が晩年に作歌を離れたことについて筆者が感想を述べている部分は、この段落の末尾にある。「さういふ窮屈さから脱して、連歌にその折々の即興をもらったのであらう」（34～35行目）の部分である。この「さういふ窮屈さ」を具体的に説明すれば、解答の核はできる。これについては、問題文中では「もはやこれ以上如何ともなしがたい」（28行目）。「これ以上どうにもならない標本を完成してしまつた」（31行目）と述べられている。これらの表現からエッセンスを抽出すれば、「定家は技巧を凝らしにこらして完成の域に達した。それが如何ともしがたいものとなった」という「窮屈さ」ということにならう。解答にあたっては、「作歌から離れた」ということに寄せて説明すべく、「作歌への興味を失うことになったから」という内容でまとめておけばよからう。

出典…安田章生『日本の芸術論』／一橋大学・01年

文章略解……香川景樹は、賀茂真淵の説を受け継ぎながら真淵の万葉ぶりとは違って日常の言葉の調べを尊重した。景樹にとっては歌は散文的な説明ではなく日常の言葉の調べを活かして詠むべきものであった。その主張には一部行き過ぎた部分があったとはいえ、歌に調べを与える原動力としての「真心」の働きを説いたのは彼の卓見であった。

現代語訳……

『随所師説』

文章はひたすら意味がわかることを基本としておりますので、誰が聞いても、少しも意味に迷わない（ように書く）のが上手（な文章）である。『古今和歌集』の序文、『土佐日記』などを御覧になるとよい。どこが意味が通じないだろうか（「||意味の通じないところなどない」）。（それら昔の文章の）中に意味のわかりづらい部分があるのは、時代の変化によって、今の言葉でないところ（「||現在は用いられていなかったり、意味が変わってしまった言葉」）である。（そういう言葉は）みな古代（「||その当時」）の普通の言葉なので、その時代の人（一般庶民に至るまで）聞いて理解できたことである。近年、万葉風という歌風が興起し、（現在の）人の理解できない言葉を使（って）詠うこと（があるが）、口を開けて笑う（「||大笑いする」）のにふさわしいことです。『万葉集』の歌も宣命の言葉も、その当時の人は少しも迷いなく理解した言葉である。その時代の通常の言葉だからである。時代が移り変わって（当時の）その言葉が今はないので、（現在の私たちに）わかりづらいだけ（である）。（雅語によって詠まれた）現在の和歌はもちろん、（俗語を用いる）狂歌も俳諧も千年の後は（すべて）同様に、どれも（その時代の人にとっては）聞いて理解し難いことが多くなってゆくものである。現在の言葉も、千年の後には廃絶するからである。そういうものである（別の時代の人が）「||どのような歌か」と当て推量に聞き知るのには、（韻律などの）調べひとつによって（「||調べを手がかりとして」）である。言葉は昔と今（「||時代の変化」）にしたがい（あるいは）都会か田舎かによって変わってゆくものなので、あてにはできないものである。私の言う調べだけは、昔から今を貫徹する（「||いつの時代にも通用する」）要素で

あつて、(いつの時代でも通じるという点では) まったく違わないものである。(このことは) ただ大和言葉だけではなく、中国(において)も蝦夷(において)も変わらないものである。そうであるのでこの調べというものを無視しては、歌はないことではございます。「歌としての価値はないことになりません」。そうしてその調べとはどういうものかというところ、(私たちが) 日常的に言い用いている普通の言葉(があるが、それが) 少しも調べと違っていることがない。「日常の普通の言葉が調べを奏するのである」。そうであるならば日常の言葉こそ(歌語の) 基準であるはずだ。歌はこの日常の言葉に帰る。「日常の言葉を用いて詠む」だけ(である)。歌を日常の言葉以外に求める。「日常の言葉以外の難解な言葉を用いて歌を詠もうとする」のは、水に背を向けて「近寄らないで」魚を釣ろうとする(のと同様の) ことである。結局その(人が狙った) 効果があがるはずもない。(しかし) 日常の言葉の調べを歌に移そうとすると、(雅語を用いて詠みたがる歌人としての) 習慣が本性となつて(いて)、簡単には成功しない。そういう状態であるのを、一時に(日常の言葉の調べを歌に詠む方法を) 得るのは誠(によつて) である。誠とは真心(のこと) である。この真心が真心であることを知れば「真心の何たるかを知れば」、自然と(日常の言葉の調べを感得する方向に) おもむくものである。その真心をどうやって手に入れるかというところ、名譽や利益を求める心を離れることより早いものはない。「名譽や利益を考えないことが一番よい」。そうではあるがこの名譽や利益の(ような飾り物(を求める心) を、一朝一夕に(自分の心から) 離れさせるのが難しいことは、恋の奴隷が打つても去らない(恋に憑かれた者が叩かれても離れない) のと同類で、これは自分の蒙昧な心で急に追い払うことのできるものでもないが、あの(大事な) 誠の心を妨げるものであるなら、できないなりに追ひ払おうとしないでは(望みの) 叶はずもない。この(名利心にとらわれるか真心を求めるか) によつて日常の言葉言葉の調べで歌が詠めるかどうか分かれる(境目を誓約致しまして「心によく留めて」、歲月(にわたつて歌を) 詠みましたら、千年の上に及び千年の下に恥ずかしくない歌(千年の昔から千年の後に至るまで高く評価される歌) も、どうして出てこない(詠めない) ことがあるのか、いや、詠めるに違いない。

『新字異見』

昔の歌の調べも意味も整っているのは、特別の理由がある訳ではない。もつぱら(歌人の) 真心より出ている(真心を基に詠んでいる) からである。真心からできた歌は、そのまま天地の調べであつて、(たとえば) 空を吹く風がものになつてはその音を出すように、(歌人の心の) あたるものとしてその調べを得ないことはない。「歌人の用いた言葉のすべてがその調べを奏するものである」。

《解答》

問1 時代も言葉も違う古歌をどんな歌かと推測して理解するのは、もっぱらその歌の調べを手がかりとしてである。〔50字・解答例〕

問2 雅語を用いて作歌する習慣から離れられず、簡単には日常の言葉の調べを歌に活かして詠めないということ。〔49字・解答例〕

問3 イ

問4 ・万葉風の古語ではなく日常の言葉を用いて詠むもの。〔24字・解答例〕

・散文のような論理的説明ではなく調べを詠うもの。〔23字・解答例〕

・名利を求めめる心を捨て真心を基にして詠むもの。〔22字・解答例〕

《解説》

問1 解釈を要求されているので、まずは傍線部の直訳からスタートする。「いかにとおしあてに聞き知る」の部分が「『いかに』と……聞き知る」というつながりであることから、「いかに」は状態・様子を問う語であると判断できる。したがって「どのような様子かと……聞き知る（理解する）」の「理解する」を修飾するのが「おしあてに」という部分ということになる。このように考えることができれば「おしあてに」の部分は現代語の「推し量って」などに相当する語句であろうと当りをつけられる（なお、「おしあて」という語の辞書義は「当て推量」である）。また、「調べ一つによりてなり」の部分の「よりてなり」が、「聞き知るものは」を受ける述語句であるという点から、「調べ一つ」の「一つ」とは理解する手段・方法の唯一のもの、というぐらいのニュアンスで用いられていることがわかる。以上の傍線部の語句レベルのポイントをふまえて直訳を作成すると、「そうであるのを（のに）どのような様子かと推し量って理解するのは、もっぱら（た

だ・ひとえに) 調べによってである」というぐらいのものとなる。ここで「推し量って理解する」対象が「歌」である点から、この直訳の「どのような様子か」は「どのような歌か」と言い換えられるだろう。

この直訳に必要な事柄を補うことになるが、当然「さるを」の指示内容は必須。傍線部直前の「時世移りて……絶ゆればなり」の部分を指している。その内容を整理すれば「時代が変わって言葉も変ってしまうので理解するのが難しくなる」ということになる。このままでは答案の中で使うのに長すぎるので簡潔に言い換える。また、「よりてなり」の部分は直訳通り「よってである」でも悪くはないが、この「よる(寄る・依る)」という語は「頼る」「依拠する」などの意味なので、そのニュアンスを明示して記述したほうがより良い。

問2

傍線部の説明を求められているが、傍線部が古文の部分にあるので、その意味の確認から始めるべき。「習ひ性」は現代語でも用いられる表現だが、「習ひ」は「習慣」、「性」は「生まれつきの性質」「本性」のこと。つまり「習ひ性」とは習慣化したことがあたかも生まれつきの特質であるかのようなになった状態をいう。したがって傍線部は、「習慣が本性のようになって、簡単には成就(成功)しない」ぐらいの意味である。ここで何が「成就(成功)しないのか」については、傍線部直前の「平語の調べを歌に移」すことと判断するのは難しくはないだろう。問題は何が「習ひ性にな」っているのかだが、傍線部の内容が「習ひ性となる」↓「成りがたし」という「前提↓帰結」の関係であることに気づけばこれも難しくはない。つまり、「平語の調べを歌に移」すのに障害となる、「本性のようになった習慣」とは何か、ということ。このように考えてゆけば傍線部を含む一文の直前で「歌を平語の外に求」める態度について「水にそむきて魚を得むとする」「その功あるべからず」としていること、また引用文前半で、万葉ぶりの歌風の、現在の人が理解できないような語句を用いる詠みっぷりについて「口を開きて笑ふべき」と言っていることなどから、「歌人の習慣となつて、平語(日常の言葉)ではない言葉」つまり「雅語」を用いて作歌することと判断できる。以上のポイントをまとめて答えとすればよい。

問3

注意すべきは、傍線部は現代文の部分に設けられているが、設問では香川景樹の考えを問うていること、そして「真心」と「調べ」の関係についてであること。選択肢の検討に際しては、以上の前提に注意する必要がある。アは「その自然の調べ」の「その」が指す内容がどう考えても「天地」であり、引用文でも現代文の部分でも「平語の調べ」とあるのだから論外である。他の選択肢は「真心」と「調べ」の関係を確認して検討する。引用文で「真心」について触れているのは傍線部二の直後からであるが、そこに「さる(平語の調べを歌に移すのが難しいこと)」を、一時に得るは誠なり。誠は真心なり。この真心の真心なることを知れば、ひとりおもむくことなり」とある点から、

出典：今井源衛の文章 / 早稲田大学 商学部・01年

文章略解……『源氏物語』の中のユーモアに才学を取り扱ったものがある。これらは形式主義・から威張り・無神経・気取りなどに対する作者のからかいと見てよいが、なかでも「博士」に対する冷酷なまでの戯画化は、並々ならぬ漢字の素養を持つ作者紫式部の、空疎な形式主義を憎む心の表出と考えられる。

現代語訳……

〔月ころ風病重きに……〕 ここ数ヶ月、風邪（をこじらせて）の重さに堪えきれず、高熱（を冷ますにんにく）の薬を服用して、（そのため）とても臭いことによって対面いただくことができません。（ですが）直接お目にかかってでなくとも、しかるべき御用事は承りましょう。

〔逢ふことの……〕 もし（あなたと）逢うことが夜を隔てない〔＝毎晩である〕仲であるならば、どうして（明るい）昼間をまぶしく気恥ずかしく思ったり、にんにくの（薬を服用して臭い）間も恥ずかしいと思うでしょうか。

〔訳注〕「ひる間」は「昼間」と「蒜（ひる＝にんにく）」との掛詞

〔おほし垣下あるじ……〕 およそ（この）宴席の相伴役の方々は、はなはだ無作法でおいでであります。これほど名の知れ渡ったこの私を知らないで、朝廷に仕えておいでであるのか。はなはだ愚かである。

〔訳注〕「垣下あるじ」は宴席の相伴役のこと、この宴に列席の右大将や民部卿をさす。

〔鳴り高し。……〕 騒々しい。静かになされ。はなはだ無作法である。（この）座を退いてぜひお立ちになるがよい。

「おどし言ふもいとをかし……」威丈高に言うのもひどく滑稽である。

「家より他に……」（自分の）家以外の所で「他人から借りて」調達した装束が、（自分の身に）あわずみつもみもない姿である（こと）などを恥ともせず、顔つき（や）声遣い（などを）もってもらしく振舞っては。

「猿樂がましくわびしげに人わるげ……」道化じみて（いかにも）貧相でみつもみもない

「才をもととしてこそ……」漢学の素養を基本としてこそ、実務的な能力が世間に用いられることも強くてございましょう。

「才かしくくなどぞ……」漢学の素養などのすぐれた方でいらっしやった。

《解答》

問1 1 || ニ 2 || ホ 3 || ロ

問2 ニ 問3 ホ 問4 イ 問5 ロ

問6 F || ニ G || ホ 問7 ハ 問8 かたぶつ

問9 戯画化 問10 空疎な形式主義を憎む（39行目）